

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

女性労働者の貯蓄口座と世帯内意思決定 ―バングラデシュの女性縫製労働者による DPS 口座の利用事例から―

(Savings Accounts of Female Workers and Intra-household Decision Making: A Case Study of DPS Account Use by Female RMG Workers in Bangladesh)

氏 名 綿貫竜史

論文内容の要旨

【研究の目的】

本研究では、バングラデシュの女性縫製労働者による DPS を通じた貯蓄活動の事例に焦点を当て、女性労働者による世帯への経済的貢献の度合いが貯蓄によって高まっているというエンパワーメントの一局面を描き出すことを目的としている。また、DPS による貯蓄活動をめぐる世帯内の意思決定プロセスを分析することで、DPS が女性のエンパワーメントにもたらした意味を考察していく。そのために、本稿で以下の三つの研究課題を明らかにすることを試みた。

- ① 給与支払い口座と DPS 口座に包摂される女性縫製労働者たちの貯蓄活動の実態を明らかにする。
- ② 女性縫製労働者が世帯内で貯蓄活動を積極的に実践する場合、その背景にはどのような世帯内意思決定のメカニズムが存在するのかを明らかにする。
- ③ DPS 口座へのアクセスがバングラデシュにおける女性縫製労働者のエンパワーメントにもたらした意味を明らかにする。

【研究の背景】

①なぜ貯蓄口座と女性のエンパワーメントなのか

世界では男性と比べて女性たちが貧困に苦しむケースが多く、このような貧困のジェンダー格差は、女性が家計の意思決定に参加する機会を制限され、世帯収入の使い道に対して十分な発言を行えないという問題によって引き起こされている。この問題の解決策として、多くの研究が重要視してきた点が女性の稼得機会の創出であった。女性が独立した収入にアクセスするということは、世帯内の資源配分に関する意思決定に強く臨む女性たちの立場を形成し、これが結果とし

て世帯内における貧困のジェンダー格差を是正する。しかし、女性が稼得機会にアクセスすることは、貧困のジェンダー格差の是正に対して必要条件である一方で、十分条件とはならない。ここで重要となるのは、世帯収入を女性が管理できるような権利をどのように付与するかということである。これに対して、稼得機会を得た女性労働者たちの世帯内における収入のコントロールを強化する手段として貯蓄口座へのアクセスが注目されている。

②なぜバングラデシュの女性縫製労働者なのか

バングラデシュ経済を支える基幹産業は縫製産業であり、縫製品は国の輸出品目の 85%を占める。また、縫製産業における労働力の大部分を占めるのは女性の労働力であり、その割合はおおよそ 7 割である。つまり、国の経済を下支えしているのは女性労働者であり、彼女たちの経済的自立を考えていくことは、同時にバングラデシュの経済成長を考えていくことに繋がっていく。そうした国の経済を支えていく女性縫製労働者たちが近年、給与支払い口座やコミットメント型の貯蓄口座に包摂され始めている。また、稼得機会に包摂された女性縫製労働者たちが、その稼得機会を貯蓄という手段によってどのように人生に役立てようとするかという戦略や意志、あるいは資源の先にある可能性を描写できる点もバングラデシュの女性縫製労働者に着目する理由である。稼得機会にアクセスした女性労働者が、獲得した賃金を貯蓄活動によってどのように活かそうとするかというプロセスの中に、エンパワーメントとは何かを再考する余地があるのではないかと考えた。

【研究の方法】

本研究では、バングラデシュの縫製工場で働く女性たちの暮らしに着目し、質問調査、半構造化インタビュー調査、縫製労働者の居住地でのフィールドワークから得た当事者の語りと行動に関する質的データをもとに明らかにする定性研究の方法をとる。本調査を実施したのは 2021 年 11 月 - 12 月と 2022 年 7 月 - 9 月の二回であり、合わせて 106 名の女性縫製労働者に貯蓄活動や世帯内ジェンダー関係に関する半構造化インタビュー調査を実施した。調査対象の縫製工場は、先述のとおり、給与をモバイル口座へ振り込む「TM Textiles & Garments Ltd.」と給与を銀行口座へ振り込む「MK APPARELS LTD.」の 2 工場である。両工場を研究対象として選定した理由は、バングラデシュにおいて給与支払いのデジタル化を比較的早い段階で導入していたためである。両工場とも 2018 年にモバイル口座及び、銀行口座への給与振り込みを導入しており、従業員の 90%以上がそのシステムを利用している。また、上記の両工場は給与支払い口座だけでなく、働く女性たちの多くが DPS 口座を所有していることが調査準備期間で発見されたため、両貯蓄形態を比較するうえでも重要な事例であるという認識に至った。

【調査結果と考察】

① バングラデシュにおける女性縫製労働者の貯蓄活動の実態

対象となった縫製工場の女性労働者が長期的な資産構築のための貯蓄口座として位置づけていたのは DPS 口座であり、対象者のおおよそ 7 割が DPS 口座へのアクセスを経験していた。一方で、給与支払い口座は一時的に収入の一部を管理するための口座として位置づけられており、口座内に残る残高も少額であった。また、女性縫製労働者が DPS 口座を資産構築のための貯蓄口座として位置づけている理由には (1) 他者が預金の引き出しに介入できないという安全性、(2) 預金額に利子が付くというインセンティブ、(3) 縫製労働者によって形成される社会関係と模倣機会の三点が関係している可能性が高い。

② 女性が貯蓄活動に参加する背景にはどのような意思決定のメカニズムが存在するのか

女性縫製労働者による DPS へのアクセスが、いくつかの側面において世帯構成員の協力的な側面を引き出す手段となっており、これが女性縫製労働者による世帯内での積極的な貯蓄活動への参加を促進していた可能性が高い。第一に、妻名義で DPS 口座が開設されることで、世帯に対する妻の経済的な貢献が可視化され、「妻は世帯に貢献している」という世帯構成員の認識が高まることで、夫の協力的な側面を引き出している。第二に、女性たちは DPS にアクセスするようになったことで、将来の世帯の経済を支える役割を担い始めている。DPS での貯蓄活動は、夫を支える妻の役割を家内での再生産労働だけでなく、経済活動の領域にまで拡張し、妻の発言力や選択機会を高めている。第三に、DPS へのアクセスが貯蓄に対する世帯メンバーの目的意識を形成し、貯蓄に対する夫婦の協力側面を引き出している。

③ DPS 口座へのアクセスが女性のエンパワーメントにもたらした意味

第一に、女性名義で開設される独立した DPS 口座は、「これまで家計のために貢献しつつも、世帯内において評価されづらかった女性たちの能力や貢献」を顕在化している。バングラデシュの女性たちは、長期的な安全保障を優先することで世帯内意思決定への参加を回避し、その裏側で可能な限りの選択肢を調べ上げながら人生をなんとか生き抜こうとする社会的行為者である。しかし、世帯内意思決定や交渉の場から後退ポジションを取ろうとする行為が、一方で彼女たちの創造性や経済的貢献を不可視的なものにしてきた。他方で、(1) 女性名義で開設される DPS 口座は、世帯収入の一部を妻自身の管理下に置く権利を同時に提供しており、世帯内において不可視的であった妻の貢献を顕在化する表象手段となっていること、(2) DPS は貯蓄の先にある「人生の可能性」を表象する手段となっており、貯蓄の先にある目的意識がより具体的かつ明確になっていくことで、世帯の経済的利益を追求しようとする女性縫製労働者の未来への貢献可能性が世帯メンバーに対して顕在化していることから、女性縫製労働者の経済的な能力と貢献を可視化する機会を提供している。

第二に、夫の経済的状況を改善しようとする妻の利他的な働きかけが、結果として彼女たちの地位を向上する可能性があり、そのような働きかけをつくりだしていた一つの要素が DPS であった。本稿の第二章で、国際社会のジェンダーに関わる議論が、「伝統的な性別役割分業の枠内で女性の教育や職業訓練、就業機会の提供を増やして女性の地位向上を目指す」WID のアプローチから、「男性が果たしている仕事の分担や世帯内の役割責任を問い直し、男女の両者の相対的な関係や女性に差別的な制度や社会の構造の変革を目指す」GAD のアプローチへと変遷してきた流れを整理した。このような変遷の流れに本稿は同意しつつも、部分的に、WID の発想を経由することで、結果として GAD が果たそうとしてきた目的を達成できる可能性を指摘できるのではないかと考えた。先述のとおり、DPS へのアクセスによって、夫を支えるという妻の家庭内での役割は経済活動の領域にまで拡張されており、これによって妻は世帯内における経済的な意思決定過程において夫の協力を引き出しやすくなっている。そして、これが結果として妻の世帯内での発言力や選択機会を高めており、世帯内における女性の相対的な地位を向上している可能性が高い。このような点を踏まえると、WID 的なアプローチが時として手段となり、その結果として GAD が目指す目的を実現する可能性があることを主張できよう。ただし、これが成り立つ背景には、そもそもバングラデシュの文化が家父長的な伝統を基盤に成り立っていることを考慮する必要があり、これが他国の事例においても当てはまるかどうかは今後も検証の余地がある。

第三に、稼得機会へのアクセスが貯蓄機会へのアクセスとどのように結びつきながらエンパワーメントに繋がっていくかという点で、本研究は新たな視点を提供している。バングラデシュの文脈

で語られてきたこれまでのエンパワーメントのプロセスは、世帯内で発言力が低かった貧困女性たちが、縫製工場での稼得機会を得ることによって、世帯内収入のコントロールに関する発言力を高め、自身が望む選択が実現されやすくなっていくというものであった。これらは「力を持たざる」女性たちが個人としての力を獲得していくプロセスを示している。他方で、本研究が捉えようとしたバングラデシュの女性たちは、すでに縫製工場での稼得機会にアクセスする低中所得層であり、世帯に対して貢献可能な能力を有する利他的な存在であった。このように、稼得機会にアクセスすることで達成する女性たちの利他的な貢献が、DPS の開設を通じて世帯内で可視化していくことにより、世帯内における女性の相対的な地位は高まっている可能性が高い。これらを踏まえると、エンパワーメントは、「力を持たざる個人」が力を獲得していく従来のプロセスだけでなく、「すでに女性たちが有する能力や達成しうる貢献が他者に顕在化されていくプロセス」までを含むことができるのかもしれない。このように、利他的な個人の能力・貢献が世帯メンバーに顕在化されていくプロセスを本研究では、「The power Visualized（顕在化された力）」と定義した。